

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：加藤 明恵 作成日：2026年1月30日

1. 教育の責任

「教育の理念」で述べる日本史メジャーの学びの目標にむけて、客観的歴史認識を深め、論理的思考力と実証的問題究明の態度を身につけるべく下記の科目を担当している。

「日本近世史講義」（講義、日本史メジャー選択必修科目、春学期、2単位、67名）

「日本史総合講義」（講義、日本史メジャー選択必修科目、春学期、2単位、25名）

「江戸時代論」（講義、日本史メジャー選択必修科目、春学期、2単位、23名）

「ゼミナールⅠ」（演習、総合研究科目、春学期、2単位、8名）

「日本近世史基礎演習」（演習、日本史メジャー選択必修科目、秋学期、2単位、44名）

「日本史総合研究」（演習、日本史メジャー選択必修科目、秋学期、2単位、24名）

「古文書学入門」（講義、オンデマンド科目、日本史メジャー選択必修科目、秋学期、2単位、394名）

「ゼミナールⅡ」（演習、総合研究科目、秋学期、2単位、8名）

2. 教育の理念

本学国際日本学部史学コース、特に日本史メジャーにおいては、その専門研究および教育をつうじて、一国史的発想にとどまるのではなく、世界の歴史の中に日本を位置づけるという発想をもって歴史認識を深める学問的態度を身につけることを理念としている。これは、本学学則第1条に定める「豊かな教養と専門的学術、旺盛な自己開発精神、優れた国際感覚及び問題解決能力を備えた人材を育成する」という本学の教育理念に合致するものである。

国際日本学部は、この理念にもとづき、学則第3条において、「人類が創造してきた文化的行為を教育研究の対象とし、学修活動の中で、文化についての深い洞察力と高い教養を身につけ、異文化に対しても広い視野をもって尊重し理解することのできる教養豊かな人材養成を目的とする」とその教育目的を定めている。日本史メジャーにおいても、このような教育目的・目標を共有している。

歴史学の一部としての日本史学は、研究対象についてそれと同時代に作成された、古文書をはじめその他さまざまな原史料にもとづいて研究することを旨としている。原史料にもとづくことによって、そうした同時代に作成されたものがいかに重要なものか、失ってはならないものかを知る。このことを通じて、文化財を保存することの意義、および現代を生きるものにとってその保存が社会的責務であることを学ぶ。また、その原史料は、これを可能な限り多くあたることによって、より広く深く、またより正確な史実を明らかにすることができる。それは、日本国内で、あるいは日本語で記載されたものにとどまらない。世界中に残された原史料に広くあたる態度は、異なる文化間の相互理解の必要性を、これを学ぶ者の心に深く刻むものである。原史料をもとに学び、そして文化財保存の重要性やさまざまな文化に対する理解を深めつつ、歴史認識を新たにしていく。これが本学の教育理念から発出した日本史メジャーの教育目的であり目標である。

3. 教育の方法

国際日本学部のディプロマ・ポリシーは、「日本および世界の多様な歴史、言語、文化、文学、国際関係に対し、尊重、理解、受容を試みることで幅広い視野と教養を持つとともに、専攻領域における専門的能力を修得している」、「国際社会や地域社会で発生する諸問題に対して、高い問題解決能力を備え、持続可能な社会の確立に寄与すべく多様な人びとと協働して課題に取り組むことができる」、「学修によって修得した英語、日本語での思考基盤能力、行動基盤能力、社会的基盤能力を発揮できる」との要件を満たすものに、学位を授与するものとしている。

日本史メジャーでは、レベルナンバー100（入門相当科目）に「日本史の扉」を、以下、レベルナンバー200（基礎相当科目）として各時代の概説にあたる講義科目（「日本中世史講義」など）や基礎的な原史料の取り扱いを学ぶ基礎演習科目（「日本中世史基礎演習」など）を、また「日本近代の都市」などの選択科目を、レベルナンバー300（応用相当科目）には、「日本史特殊講義」および「日本史特殊研究」、また各時代ごとの特論（「南北朝～戦国時代論」や「江戸時代論」、「二つの大戦と日本社会」など）を、レベルナンバー400（発展相当科目）に「日本史総合講義」および「日本史総合研究」といった科目をそれぞれ配置し、学生が段階ごとに講義と原史料を用いた演習系科目を組み合わせて履修することによって、学部の定めるカリキュラムポリシーが実現できるよう、

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：加藤 明恵 作成日：2026年1月30日

教育カリキュラムが組まれている。また、ここには同時に「古文書学入門」、「古文書演習入門」、および「古文書演習応用」の科目もおかれ、原史料に基づいた学びがより深められるようになっている。

当該教員（加藤）は、このカリキュラムの中で、200 科目の「日本近世史講義」、「日本近世史基礎演習」、「古文書学入門」、300 科目の「江戸時代論」、400 科目の「日本史総合講義」、「日本史総合研究」を担当している。

「日本近世史講義」は基礎的な内容を扱う講義として、日本近世政治史の概説を中心とした。教科書は用いず、やや詳細にレジュメを作成して配布した。近世史を理解する上で基礎となるような、政治構造・社会構造および両者の関係についてその歴史的展開をレジュメやパワーポイント資料をもとに説明した。

「江戸時代論」は、近世の伊丹郷町の町運営・領主支配の事例を取り上げたが、近世地域史の基礎的な知識が得られるよう、関連する研究を紹介し、近世の社会・政治に対して理解を深められるように説明した。歴史資料を読解も取り入れ、史料をととした歴史像の読み取りについても説明した。レジュメを配布して講義形式で行った。レポート作成に際しては関連論文を紹介した。

「日本近世史基礎演習」「古文書学入門」は、近世史料に書かれた文字（いわゆる「くずし字」）を読むことを重視した。前者は対面授業、後者はオンデマンド授業であるが、いずれも「くずし字辞典」の引き方を説明し、どのようにすれば自分一人の力だけでも「くずし字」を読むことができるのか、文字の読み方を丁寧に解説することを目指している。また、解読した文章を現代語として解釈し、歴史的な背景を考えられるように解説を加えている。対面授業の「日本近世史基礎演習」では、学生に自ら解読したくずし字を読み上げてもらい、積極的な授業への参加を促している。

「日本史総合講義」「日本史総合研究」は、近世史料の読解・解釈と内容理解に重点をおいた。春学期の「日本史総合講義」では、身近な地域の歴史に興味をもってもらえるよう、現西宮市域を中心に村方騒動・一揆関連史料を取り上げた。授業中に学生に史料からどのようなことが読み取れるかを考えて発表してもらった。秋学期の「日本史総合講義」では、現神戸市内の村方文書を取り上げた。授業中に学生に史料の読み下し文を発表してもらい、課題として史料の内容解説レポートを課した。それぞれの授業中では、史料の読解で注意すべき点や史料が作成された歴史的背景などを説明し、史料読解・解釈・内容理解とその歴史的な位置づけの検討という作業を、学生が授業を通じて身につけることができるよう取り組んでいる。

3 年生向けの「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」では、4 年次の卒業研究に向けて、学術的な論文等を読んだり、歴史資料を読解して歴史像を組み立てたりするための訓練を演習形式でおこなった。学生の発表内容について受講生からも質問してもらい、各自が主体的に授業に参加することを求めている。

それぞれの授業資料は授業前に el-Campus にアップロードし、手元で確認できるようにしている。また授業中には随時質問を受け付ける、もしくは el-Campus 上に質問投稿コーナーを設け、不明点等があれば回答できるようにしている。

4. 教育の成果

2025 年度春学期の学生アンケート結果は平均未満もしくは平均並であった。

授業の発表・提出物・試験等から、基礎科目については理解度・習熟度に大きな差がみられる傾向にあるものの、応用科目については、特に史料読解やレポート作成において概ね一定以上の水準に達できていると判断している。

5. 改善への努力と今後の目標

講義形式の授業は学生・教員間の双方向性が弱くなりがちであるため、授業中の学生の発言・リアクションペーパーでの質問やそれに対するフィードバック等によって、授業への理解の深化や積極的な受講につなげていきたいと考えている。また、図表も適宜用いて歴史像をよりイメージしやすくなるように工夫を重ね、学生に日本近世史、特に近世の地域史に対してより興味をもってもらえるようにしたい。

【添付資料】

なし